

性
法
略

單

71 390
7140



門 7140
號
卷

冊 一
號 九
函 29



明治四年春新鑄

性法略

求故堂藏板

通舊



性法略序
弱之肉。強之食也。今夫當鐵
甲之艦。突發之彈。相爭於烟
焰。驀起之際。孰知烏之雌雄。
當此時。儒冠可得而溺矣。雖

生法略

單

首一

求故堂藏板

然。不可遂以馬上治天下。則
丁公之戮雍齒之封不可已。
而約法三章。不可謂無用意
也。法律淵源乎人性云者。豈
謂虛妄耶。西洲有此論。創乎

和蘭虎哥氏。而此書係畢氏
之口訣。而余等筆之者。今茲
庚午之冬。神田判官譯而梓
之。余喜合素志。因慙通公世。
而較諸本論。繭絲牛毛之微。

殊露其一斑耳。然學者由是而為楷梯焉。則庶幾他日觀全豹之一助云。

明治庚午玄冬、華西周撰

大倭ハ言舉せ慈國といひて豊聽耳
太子ハ憲法裁定させ賜ひし時まで
を世の中此さほおほらかふし多た
ど神隨平らけと安良々れあむあり
けはゆふを西洋の國々は遠き昔々
也律法てふ言此さる五月蠅な言
痛加ゆ々也さハ以へ志の種々也律

法を皆神隨カムナガラちゆ々る人の性サガも基モトけ
正マサといへば是の性法畧といふし年
吾儕ワレラ和蘭オランダふ何ナニ正マサし不フぞ師シ此ココ口授クチツクの
まに／＼彼國文カノクニノモノふてものして持歸
ゆけふをまよび神田カミタぬし此ココのくま
まの言葉コトバふるゆさまゑはゆるてやぐ
て百八十ヒャクジャチ此ココ律法リツポフを論ロンひとる書シヤの祖オヤ

をぞいたまし加しゐて此論ココノロンは
この名残ナノシズメ法學理論ポフガクリョウといへばマサダル世
中ナカ此ココうウのノ正マサゆユのノ何ナニゆユはハ明アカ日ヒ香カ
の川カハ此ココ淵フチ瀨セふフひヒをヲしシくクきキのノふフ此ココ是ヨキ
を今日ケフのノ非アヒキと難波ナニハ此ココをヲしシ何ナニしシさへ
もおあじアヒラカのノらラざるズハハ學者ガクシヤ此ココ論ロンのノ日
あけアキラカ不明フメイふ成ナリゆユけケれレをヲぬヌゆユ々々正マサは

まばうはせみの世をうけ環の玉は
 端な死ぐ如くまゐ言擧せぬむかし
 尔還ふ時なからめやと殊更ふ言擧
 去依を津田眞道時を明治の三年を
 いふ年の霜月の廿三日

この各段を學野館と云ふは、
 今更ふ言擧せぬむかし

昔云々緒言々々合々々々

一此書ハ去ル文久癸亥歲社友津田西ノ兩氏和
 蘭ニ留學セシ頃彼國來丁府ノ大學校ニ於テ
 政科大博士畢洒林氏ノ口授ヲ受ケ筆記セシ
 所ナリ當時筆記セシ者五種アリ其一性法其
 二萬國公法其三國法其四經濟學其五綜紀學
 一ナリ畢氏云萬國公法ハ性法ノ萬國間ニ行ハ
 ルハ者國法ハ性法ノ官民間ニ行ハルハ者ナ
 リト由是觀之諸種ノ律法其趣相異ナリト雖

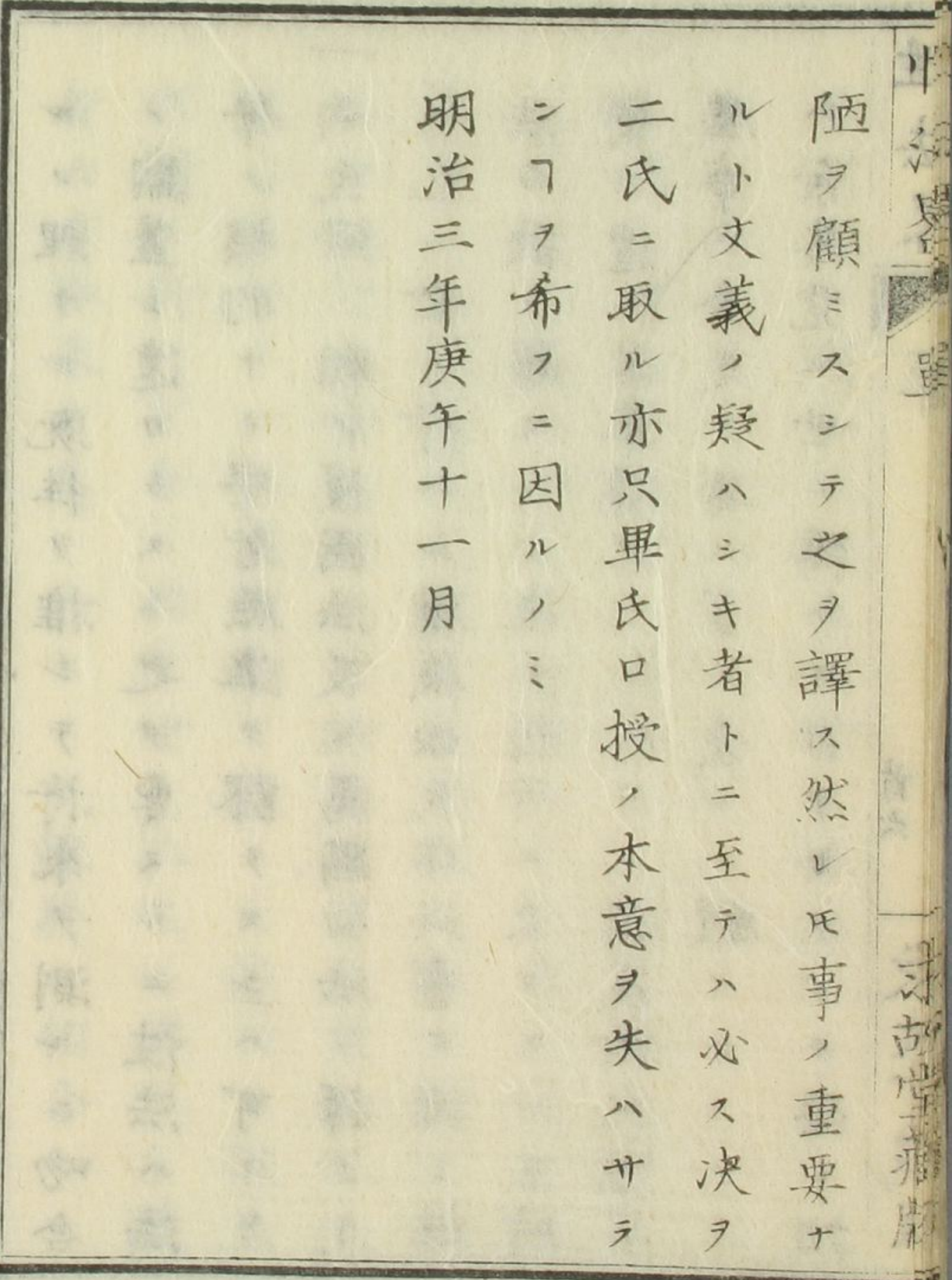
其淵源ヲ究ムレハ未夕嘗テ性法ヨリ出テス
ンハアヲサルナリ

一各種ノ律法皆性法ニ淵源スト雖其間所謂舊
習成例共議立約ノ類相錯ハリテ悉ク性法ニ
合スルニ至ラス文教未届ノ故ニ非サルヲ得
ンヤ西史ヲ案スルニ昔時西國律法殆ト性法
ニ合セサリシカ文教漸ク進ムニ迨ンテ性法
亦漸ク行ハレ今ハ殆ト十ノ八九ニ及ヘリ識
者云方今未夕悉ク合セスト雖終ニ相合セサ

ルノ理ナシ既往ヲ推シテ將來ヲ測ルニ吻合
ノ期蓋シ遠カラスト之ヲ要スルニ性法ハ法
學ノ標的ナリ學者照準ヲ謬ラスンハ可ナリ
一兩氏歸朝ノ後國法及ヒ萬國公法ノ譯アリ
テ已ニ世ニ行ハル爾後西氏亦此書ヲ譯シ性
法口訣ト題セシカ未夕刊行ニ至ラスシテ時
變ニ遭ヒ其草稿ヲ亡シタリ其後兩氏俱ニ
塵事ニ奔走シ再ヒ筆ヲ秉ルノ暇ナカリシカ
ハ余其竟ニ世ニ傳ハルヲナカランヲ恐レ拙

陋ヲ顧ミスシテ之ヲ譯ス然レ氏事ノ重要ナ
 ルト文義ノ疑ハシキ者トニ至テハ必ス決テ
 二氏ニ取ル亦只畢氏口授ノ本意ヲ失ハサテ
 シテヲ希フニ因ルノミ

明治三年庚午十一月



性法略

目次

第一編	總論	十五條
第二編	原有ノ權ヲ論ス	三條
第三編	生存ノ權ヲ論ス	十條
第四編	言行ノ權ヲ論ス	四條
第五編	用物ノ權ヲ論ス	七條
第六編	得有ノ權ヲ論ス	六條
第七編	物件上ノ權ヲ論ス	三條

第八編

私有ノ權ヲ論ス 廿二條

第九編

私有權并ニ其餘物件上ノ權ノ消盡

放擲傳授等ヲ論ス 十九條

第十編

他有ノ物件ヲ使用スルノ權ヲ論ス

五條

第十一編

人身上ノ權ヲ論ス 二條

第十二編

天倫ヨリ生スル人身上ノ權ヲ論ス

三條

第十三編

行為ヨリ生スル人身上ノ權ヲ論ス

第十四編

契約ヨリ生スル人身上ノ權ヲ論ス

廿三條

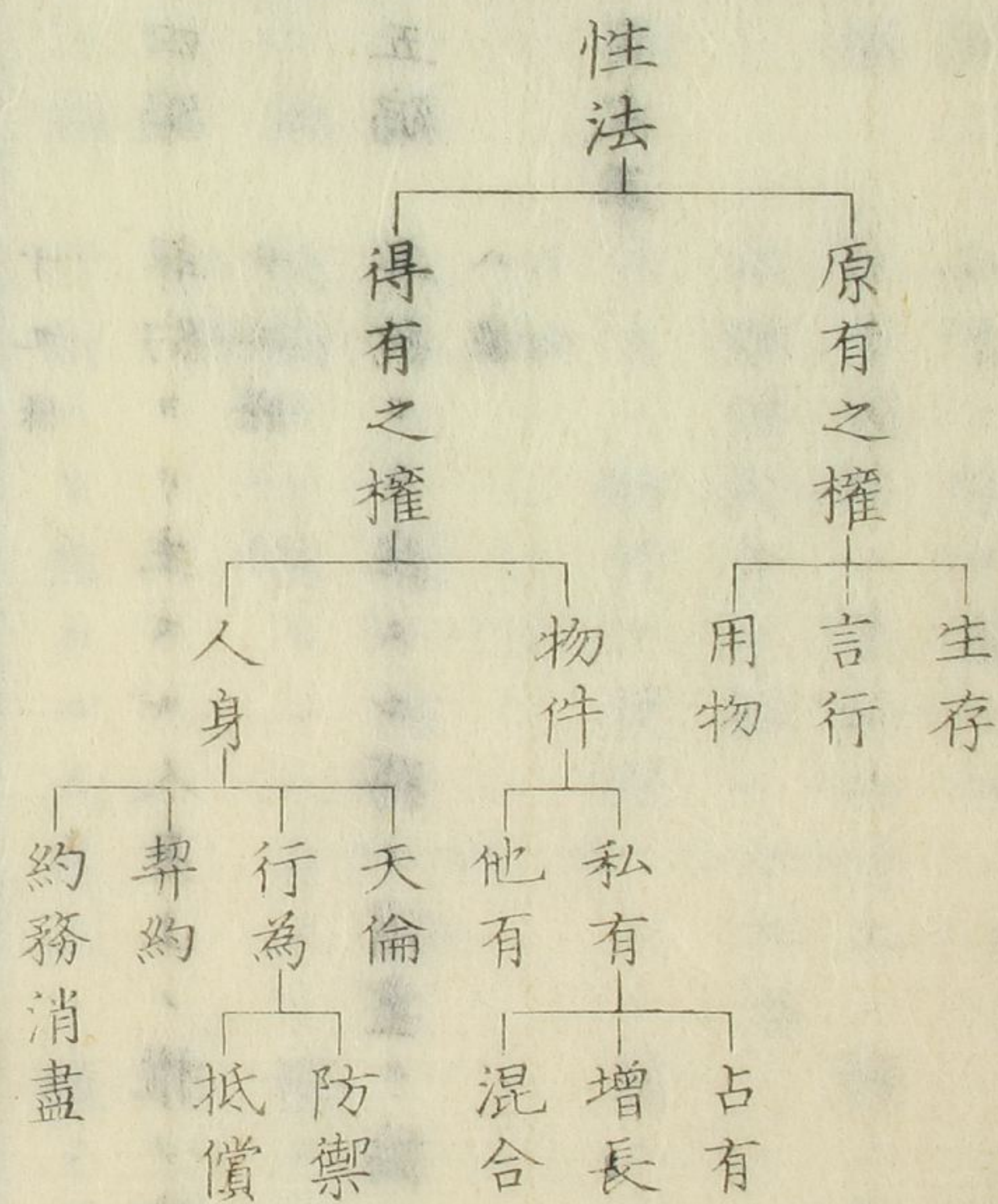
第十五編

契約ヨリ生スル務ノ消盡ヲ論ス

八條

目次畢

性法分系圖



性法略

第一編 總論

神田孟恪 譯

第一條

性法ハ人ノ性ニ基ク所ノ法ナリ

第二條

人ノ世ニ在ル相生養セサルヲ得ス命ナリ

第三條

相生養ス故ニ萬般ノ事依テ以テ興ル

第四條 既ニ事アレハ規則ナカル可ラス法ノ生スル所
以ナリ

第五條

人ノ性タル能ク善惡曲直ヲ辨別ス

第六條

惡ヲ為ス者自ラ能ク其為ス所ノ惡タルヲ知ル
曲ヲ受ル者自ラ能ク受ル所ノ曲タルヲ知ル

第七條

甲モシ乙ニ對シテ惡ヲ為ストキハ吾輩能ク孰
レカ曲タルヲ知ル

第八條

吾輩ノ言行ノ善惡ヲ總判スルハ道學ノ區域ニ
屬ス

第九條

此彼相關スル事ノ善惡ノミヲ判スルハ性法ノ
區域ニ屬ス

第十條

性法ノ區域ニ屬ス

性法ノ最大條例ニ曰ク己カ欲セサル所ヲ人ニ施スヲ勿レ

第十一條

性法ノ重要條例ニ曰ク各人言行十分自在タル可シ然レ氏己カ自在ヲ以テ他人ノ自在ヲ害スルヲ得ス

第十二條

自在ノ權ニ反對シテ一條ノ務アリ曰ク他人ノ權ヲ敬禮セサルヲ得ス

第十三條

性法ノ行ハル、三種ノ別アリ

- 其一 各人交接ノ間ニ行ハル私法
- 其二 政府ト人民トノ間ニ行ハル國法
- 其三 彼政府ト此政府ノ間ニ行ハル萬國公法

第十四條

前條三種ノ律法ハ皆性法ノ要旨ト相庭運セサルヲ要ス

第十五條

性法ノ要旨ト相庭運セサルヲ要ス

三種ノ律法ニ就キ更ニ左ノ分別アリ

其一 原有ノ權

其二 得有ノ權

第二編 原有ノ權ヲ論ス

第一條

原有ノ權トハ吾輩世ニ生レシ時ヨリ須臾モ離ル可カラサル權ヲ云

第二條

原有ノ權ヲ一名生來權ト云生レナカラニ備ハレルヲ云ナリ

第三條

原有ノ權ノ目三アリ

其一 生存ノ權
 其二 言行ノ權
 其三 用物ノ權

第三編 生存ノ權ヲ論ス

第三編 生存ノ權ヲ論ス
 第一條

生存ノ權トハ我カ生命ヲ保守スルノ權ヲ云ル
 第二條
 吾輩生存ノ權アリ故ニ何人ニ限ラス非理ノ所
 業ヲ以テ吾輩ノ生命ヲ奪フコトヲ得ス

第三條
 吾輩天ヨリ受ケシ生命ニ毀傷ヲ受ケサルノ權
 モ亦生存ノ權ノ屬ナリ

第四條

前條ノ故ニ依リテ何人ニ限ラス非理ノ所業ヲ以テ我身體ヲ痛メ創ツケ或ハ溺ラス等我健康ニ害アル事ヲ為スコトヲ得ス

第五條

但シ我カ生命及ヒ健康ヲ保ツノ計ヲ為スニ當リ我カ力及ハストテ他人ノ之ヲ救ハサルヲ恨ムコトヲ得ス

第六條

五ノ條ノ事ヲ論ス

小兒ヲ養育スルハ親タル者ノ務ナリ故ニ小兒ノ親ニ向テ助ケヲ乞フハ前條ノ例ニ非ス也

第七條

貧窮廢疾ヲ救ク危難ニ臨メル者ヲ助クル等ノ如キハ道學ノ區域ニ属シ性法ノ事ニ非ス

第八條

吾輩生存ノ權ヲ以テ生命健康ヲ保ツノ計ヲ為スト雖之ヲ恃シテ他人ノ生存ノ權ヲ損害スルコトヲ得ス

第九條

前條ノ故ニヨリテ已レ饑タリトテ他人ノ食ヲ奪フハ曲ナリ又兩溺人一小木材ニ逢ヒタルハ並ニ乗ルトヲ得サルヲ以テ他人ヲ排斥シテ己ニ獨リ乗ルハ曲ナリ

第十條

他人モシ曲行ヲ以テ我カ生命健康ヲ損害スルトアテハ相當ノ方略ヲ以テ之ヲ防クハ我カ生存ノ權ニ在リ 第十編

第四編 言行ノ權ヲ論ス

第一條

言行ノ權トハ己カ欲スル所ハ他人ノ許シヲ待タズ自在ニ施行スルノ權ヲ云

第二條

各人自在ニ其身體ヲ遣ヒ心志ヲ用フルトヲ得ルノ權モ亦言行ノ權ニ屬ス

第三條

吾輩言行ノ權アリト雖他人身上ノ自在ヲ妨ク

ルニ至ルヲ得ス第十編

第四條

是故ニ強カヲ用ヒテ他人ヲ抑制スルノ權ハ得
有ノ權ニ基ツカサレハ之ヲ行フヲ得ス第十編

第五編 用物ノ權ヲ論ス

第五編 用物ノ權ヲ論ス

第一條

用物ノ權ハ生存言行ノ兩權ヨリ直ニ生スル所
ナリ

第二條

人ノ世ニ在ル断ハス百物ヲ資用スルニ非サレ
ハ其生ヲ保ツヲ得ス

第三條

吾輩生命ヲ保チ疾病ヲ免レント欲セハ相當ノ

飲食ヲ欠ク可ラス

第四條

吾輩若シ一生ヲ快活ニ送ラント欲セハ更ニ許
多ノ品物ヲ需用セサル可ラス

第五條

物ヲ用フルハ言行ニ属ス故ニ我カ好ニ應シテ
物ヲ用フルノ權ハ言行ノ權ヨリ生スルナリ

第六條

用物ノ權ヲ行フニ得失アリ此得失ハ道學ヲ以

テ論断ス可シ性法ヲ以テ論断スルヲ得ス

第七條

性法ニ在リテ用物ノ權ヲ行フニ當リテ只左
ノ二章ニ注意スルヲ要ス

其一 他人ノ權ヲ縮メントノ主意ニテ物ヲ

用フルヲ得ス

其二 用物ノ權ヲ一人之ヲ得トシ他人之ニ

與カルヲ得ス

性法ニ在リテ用物ノ權ヲ行フニ當リテ只左

第六編 得有ノ權ヲ論ス 第一編 第十五條

第一條

得有ノ權トハ生存ノ故ノミナラス作業事故ヨリ生スル權ヲ云

第二條

得有ノ權亦分ツテ二トス

其一 物件上ノ權

其二 人身上ノ權

第三條

物件上ノ權トハ獨力合力ニ抱ハラス物件ヲ採リテ所有トシ之ヲ消費シ之ヲ受用スルノ權ヲ云

第四條

故ニ物件ニ就テ行フ所ノ業ヨリ生スル者ハ物件ノ權ニ屬ス

第五條

人身ノ權トハ他人ノ言行ニ関カル權ヲ云

第六條

...

故ニ人我ノ間ニ行ハル、事端ヨリ生スル者ハ
人身ノ權ニ屬ス

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 故、事、端、ヨ、リ、生、ス、ル、者、ハ、人、身、ノ、權、ニ、屬、ス、）

第七編 物件上ノ權ヲ論ス

第一條

物件上ノ權ノ最急最要ナル者ヲ私有ノ權トス

第二條

私有ノ權トハ某物ヲ採リ全ク己レカ私有トナ
シ專權ヲ以テ或ハ處置シ或ハ消費シ他人ヲシ
テ之ニ關カラシメサルヲ云

第三條

物件上ノ權其他尚有ト雖必竟私有ノ權ノ支派

ニ屬ス即チ處置消費十分チラサル權ヲ指スノ
三條至八編自第十九條

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

第八編 私有ノ權ヲ論ス

第一條

私有ノ權ノ根據ヲ論スル衆說一ナラス爰ニ其
最明確ナル者ヲ舉ク

第二條

人ノ世ニ在ル品物ヲ資用スルコトナケレハ其生
ヲ保ツコトヲ得ス第五編
第二條

第三條

言行ノ權ヲ擴充スレハ物件ヲ消費スルコトモ亦

之ニ屬ス可シ第五編
第五條

第四條

但シ一人ニテ專ラ物件ヲ消費セント欲スルハ其物件ヲ區別シ他人ノ言行ヲ阻隔スルニ非サレハ能ハス

第五條

假令ハ己カ體ヲ養ハシカ為ニ飲ミ且ツ食ハシト欲スルハ其飲料食料ヲ己一人ニテ專ラ消費セサルヲ得ス

第六條

是故ニ私有ノ權ノ大本ハ占有ニ在リ即チ其物件ヲ取テ自己專制ノ用ニ供スルナリ

第七條

凡物イマタ其主アラサレハ誰ニ限ラス之ヲ取テ占有スルヲ妨ナシ

第八條

凡物ヲ一夕ニ占有スル時ハ何時何法何形ニ抱ハラズ己カ意ニ任ヤテ之ヲ用フルヲ得ヘシ

第九條

徒ニ己カ有ト称スルモ其實蹟テキ時ハ私有ノ
權アリト為ス可ラス

第十條

移動物不移動物ニ抱ハラス其一分ヲ區別シ得
ヘキ者ハ總テ之ヲ占有スルコトヲ得可シ

第十一條

地面并ニ地面ニ固着スル者ヲ不移動物トス移
動スヘキ者并ニ自ラ移動シ得ル者ヲ移動物ト

第十二條

私有ノ地ニ非サレハ之ヲ耕シテ其産物ヲ収ム
ルコトヲ得ス

第十三條

會社ノ通有モ亦私有ノ部ニ屬ス可シ蓋シ二人
以上合同シテ某物ヲ有シ且ツ之ヲ使用シ其他
ノ人ヲシテ之ニ關カレシメサレハ之ヲ會社ノ
私有ト云フ可キナリ

第十四條

眾人相合シテ有スル所ノ者ハスヘテ會社ノ私
有ナリ故ニ一群ノ人民住居スル所ノ土地モ亦
其人民ノ合同私有ナリ

第十五條

右ノ外私有ヲ得ルニ尚ホ二道アリ

其一 增長

其二 混合

第十六條

增長亦分ツテ二トス

其一 私有以物ヨリ吾力ヲ勞シ或ハ勞セス

其ノ例ハ新ニ生シタル者例ハハ丹木ノ實

或ハ畜牧ノ子ノ如シ

其二 私有ノ物ニ來リ附キ自然一體トナリ

其ノ例ハタル者例ハハ己カ有セル河邊ニ流レ

タル者ヨリタル土砂ノ如シ

第十七條

二物各其主ヲ異ニスル者ヲ合シテ復タ分ツ可

ラサルニ至レハ之ヲ混同ト云例ハ二苞ノ穀
二瓶ノ酒等ヲ混合スルカ如シ

第十八條

二物各其主ヲ異ニスル者ヲ混同スレハ其混同
物ハ二主ノ合同私有タルヘレ

第十九條

其外物件上ノ權ハ私有ノ權ノ分派タリ
目頗ル多ク其指ス所亦随テ異ナリ

第二十條

ニ...

右物件上ノ權處置ニ屬スル者アリ消費又ハ使
用ニ屬スル者アリ

第二十一條

處置ノ權トハ事物ノ取扱ヒ借貸ニ關係スルヲ
云ナリ

第二十二條

消費使用ノ權トハ他人ノ物件ヲ用フルヲ云
借屋并ニ物
成收受ノ類

第九編 私有權并ニ其餘物件上ノ權ノ消盡
放擲傳授等ヲ論ス

第一條

原有ノ權一名生來權ハ生レナカラニシテ備ハ
ル者ナリ第一編第二條故ニ死セサレハ消盡スル
ナシ

第二條

故ニ原有ノ權ハ他人ニ之ヲ奪フコトヲ得ヌ又之
ヲ與フルコトヲ得ヌ

第三條

得有ノ權ハ人ノ生死ニ關カラス故ニ消盡スル
コトアリ放擲スルコトアリ他人ニ傳授スルコトアリ

第四條

私有ノ權及ヒ其外物件上ノ權ハ其物消盡スレ
ハ亦随テ消盡ス可シ

第五條

私有ノ物モシ混合增長ノ故ニ依リテ他物ト相
合シ專有供用スルコト能ハサルニ至レハ其權隨

テ消盡スヘシ

第六條

私有ノ權ヲ放擲ストハ私有物ヲ己カ意ニテ廢棄シ復タ之ヲ有タス之ヲ用ヒサルヲ云

第七條

人モシ其私有ノ權ヲ放擲スルモ其物ハ之ヲ取り得タル者ノ有ニ歸ス可シ

第八條

私有物ノ傳授トハ他人ニ其物ヲ讓リ其人ヲシ

天已嗣代リ之ヲ有セシメトノ意ニテ其權ヲ

放擲スルヲ云

第九條

私有物ヲ傳授スルノ道一ナラス預メ約ヲ立テ

サル者アリ之ヲ贈遺ト云預メ約ヲ立ル者アリ

第十條

私有物ヲ死スルノ後ニ傳授スルカ如キ性法ニ於テ其權アル可キヤ否ヤ學者ノ説イマタ一定

第十一條

或云身死スレハ一切固有ノ權悉ク消盡スヘシ
故ニ生前有セシ所ノ物モ亦其歸スル所ヲ失フ
可シ

第十二條

或云人ノ物ヲ有スルヤ之ヲ處置スルノ全權ア
ル乃チ亦其將來ノ處置ヲ為スルヲ得ヘシ故ニ
死ニ臨ミテ己カ欲スル所ノ人ニ物ヲ與フル

アル可シ

第十三條

右ノ說ヲ主張スル者ハ遺言ニテ物ヲ處置スル
ノ權ヲ存セントス

第十四條

其徒又云死者ノ遺言明カナラサレハ其遺物ヲ
其子若クハ親戚ニ與フルヲ以テ死者ノ志ノ存
スル所ト為スコシト故ニ遺言ナク後嗣ナクシ
テ尚ホ遺物傳授ノ說ヲ墨守ス

第十五條

或云物主生存ノ際父子既ニ其私有ヲ相通シ或ハ親戚亦通有ノ形ヲ為ス者アリ故ニ遺物傳授ノトハ自然已ヲ得サルノ理ナリ

第十六條

其徒又云自然ノ理ニ基キタル傳授ナルカ故ニ死者明確ナル遺言ヲ為スニ非サレハ之ヲ變改スルトヲ得ス

第十七條

或云人ノ世ニ在ル約ヲ結フト固ヨリ多シ而シテ其約人死スルノ後ニ至リテ消止セス

第十八條

又云人死シテ約消ヘサレハ其約ニ係ル權ト云フ務ト云フ者亦消ユルノ理ナシ遺物傳授ノ事アルユヘシナリ

第十九條

家ニ明確ナル説ニ云理ヲ論スレハ性法ニ遺物傳授ノ權アル可ラス然レモ人間須臾モ己ニ可

ラサルコナルヲ以テ從來成例トナリテ世ニ行
ハル、也

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

第十編 他有ノ物件ヲ使用スルノ權ヲ論ス

第一條 因公共ニ爲スル必要ニ由リテ

人其私有物ヲ他人ニ附シ之ヲ用ヒシムルモ妨

ケナシ其報酬ヲ取ト取ラサルトヲ論セス 借田 借屋

借器

第二條

或云他人ノ私有物ヲ時宜ニヨリ其意ニ及シテ
用フルコトヲ得ヘシ

第三條

所謂時宜其一云之ヲ用ヒテ物主ニ害ナキ片ハ之ヲ用フルモ妨クナシ之ヲ無害用ノ權ト云

第四條

其二云人危急ノ場ニ臨メルキハ自ラ救ハンカ為ニ何物ヲ用フルモ妨ケナシ之ヲ臨危ノ權ト云

第五條

右兩時宜ハ万国公法ニ於テ殊ニ屢々前例アリ

第六條

然レハ右兩時宜ノ權ハ太夕私有權ノ要義ニ悖レリ蓋シ私有ニ屬スル者ハ其主獨リ自在ニ之ヲ處置スルヲ得ヘシ他人決シテ之ニ關カルヲ得ストノ義ニ悖レリ

第七條編

第十一編 人身上ノ權ヲ論ス第六編 第二條

第一條

人身上ノ權トハ他人ヲメ物ヲ與ヘ事ヲ行ヒ或ハ許シ或ハ忍ハシムルノ權ヲ云

第二條

人身上ノ權ノ目三アリ

- 其一 天倫ヨリ生ス
- 其二 各人言行ヨリ生ス
- 其三 交互契約ヨリ生ス

第十二編 天倫ヨリ生スル人身上ノ權ヲ論ス

第一條

天倫ヨリ生スル人身上ノ權トハ親子ノ間ニ行ハルノ權ヲ云

第二條

親既ニ子ヲ生マハ其子自立ヲ為シ得ル年齢ニ至ルノ間之ヲ養育セサル可ラス之ヲ其親ニ屬スル務トス

第三條

小兒ハ親ニ對シテ其務ヲ盡サシテヲ求ムルノ
カナシ然レ氏之ヲ求ムルノ權ハ自然ニ小兒ニ
備ルル為スヘシ自ラ其生ヲ保ツノカナキテ十
分明ラカナレハナリ

第六條
第七條
第八條
第九條
第十條
第十一條
第十二條

第十三編 行為ヨリ生ル人身上ノ權ヲ論ス

第一條

各人行為ノ權ハ固ヨリ原有ノ權ニ屬ス但シ他
人身上ノ自在ト相悖ラサルヲ以テ度トス

第一條至
第三條

第二條

他人若シ我カ身上ノ自在ヲ妨クルキハ我カ自
在ノ權之カ為ニ損ス之ヲ患害ヲ受クト云

第三條

注 法 單 廿 古堂

吾輩若シ患害ヲ受クハ随テ左ノ二權ヲ生ス
其一 防禦ノ權
其二 強償ノ權

第四條

防禦トハ患害ヲ防キ且ツ避クルヲ云

第五條

性法ニ於テ防禦ノ權トハ害ヲ為サントスル者
ヲシテ其身上自在ノ權ノ限ヲ越ヘシメス我カ
權ヲシテ減縮セシメサルヲ云

第六條

他人若シ害ヲ受ル片之ヲ助ケテ防禦スルモ妨
ケナシ然レハ必要ノ務ニハ非ス

第七條

他人我カ救ヲ求ムル意ナシ然ルニ強テ是ヲ救
ハントセハ我則チ他人身上ノ權ヲ減縮スルニ
テ即チ之ヲ害スルナリ

第八條

防禦ノ道何方略ヲ用フルモ妨ケナシ但シ之ヲ

防クニ必要ナル度ヲ過ク可ラス若シ其度ヲ過クル時ハ是れ却テ彼ヲ害ス防禦ト云ヘカラス

第九條

防禦ノ權ヲ行ハント欲セハ他ノ我ヲ害スル事業ヲ成シ終ルヲ待ツ可ラス若シ之ヲ待タハ往々防禦ノ機會ヲ失フニ至ル可シ

第十條

他人若シ我ヲ害セントスル事業アラハ之ヲ其始ニ支フルモ妨ケナシ是亦防禦ノ權ニ属ス

第十一條

然レハ將來ノ害ヲ慮リ或ハ言語ニ怖レ其實蹟未タ顯ハレサルニ之ヲ防カントスルカ如キハ防禦ノ權ト為ス可ラス

第十二條

或云預防ノ權亦存セサル可ラスト若シコノ説ニ從ハハ恐クハ許多ノ擅横ノ一是レヨリ起ラシ戒メサル可ラス

第十三條

強償ノ權トハ我權ノ損傷ヲ受ケタルヲ補修スルノ權ヲ云

第十四條

是故ニ右ノ權ヲ行フノ主意ハ我カ損傷ヲ受サリシ以前ノ景況ヲ回復スルニ在リ

第十五條

然レ此此事多ク實際ニ行ハレ難キカ故ニ損害ニ相當セル品物又事功ヲ以テ抵償ト為サ、ルヲ得ス

第十六條

抵償ノ多寡ハ害ヲ受ケタル者ノ心服ニ至ルヲ度トス未タ心服ニ至ラサレハ受ル所ノ害未タ除カサルナリ

第十七條

故ニ抵償ノ多寡ヲ定ムルノ權ハ獨リ害ヲ受ケタル者ニ存ス可シ

第十八條

強償ノ權ヲ行フニ當テハ我ニ加ヘシ害ノ故意

ニ出ツルト否トノ差別ヲ為サス

第十九條

但シ全ク無心ニテ為セシ暴狂人類亂又ハ偶然

ノ事變ニ出テ、人ノ怠慢ニ依ラサル暴風樹枝折

受ル損傷類等ハ害ヲ受クト雖強償ノ權アルヲ得

ス

第十六條

第十四編 契約ヨリ生ズル人身上ノ權ヲ論

第一條

各人身上自主ノ權アリ故ニ亦事物ヲ處置スルノ權ヲ随意ニ他人ニ附與スルヲ得ヘシ

第二條

二人以上相議シテ右處置ノ權ヲ授受スルキハ之ニ就キテ契約ノ事アリ

第三條

注 共 文 義 載 反

契約ノ道三種アリ

其一 雙方互ニ意ヲ示シ或ハ言語或ハ書牘
ヲ以テ預メ為ス者

其二 世上通用ノ証驗ヲ用フル者

其三 實地ニ授受ヲ為ス者

第四條

互ニ意ヲ示スハ必シモ同時ヲ要セス書狀ヲ以
テ往復スルモ可ナリ但雙方共ニ意ヲ示スノ後
ニ非サレハ契約ノ了成レリトセス

第五條

既ニ契約アレハ亦之ニ屬スル務アリ其趣ハ互
ニ意ヲ示スキニ定マリ以テ契約ノ要領ヲ為ス
ナリ

第六條

契約ニ屬スル務或ハ一方ニ屬シ或ハ雙方ニ屬
ス

第七條

事物ヲ為シ物ヲ與ヘ或ハ免シ或ハ忍フ等ノ務

唯一方ニ属スルキハ之ヲ片務トス

第八條

事ヲ為シ物ヲ與ヘ或ハ免シ或ハ忍フ等ノ務雙方ニ属スルキハ之ヲ雙務トス

第九條

契約ニ純粹及ヒ帶情ノ別アリ

第十條

務若シ直チニ契約ヨリ生スルキハ之ヲ純粹ノ契約ト云

第十一條

務若シ契約外ノ情状ニ關係スルキハ之ヲ帶情ノ契約トス

第十二條

契約ノ成就セシムヲ欲セハ次ノ二件ヲ欠ク可ラス

- 其一 雙方契約ノ意志湊合フルヲ要ス
- 其二 契約ノ主意道理アルヲ要ス

第十三條

一方契約ノ意ナキニ他ノ一方強壓シテ之ヲ為
サシムルハ意志湊合ト為ス可ラス

第十四條

強壓トハ弱ヲ侮リテ暴ヲ行フヲ云單ニ之ヲ威
トスカ如キハ未タ強壓ト名ツクルヲ得ス

第十五條

一方若シ詐術ヲ以テ他ノ一方ヲ欺キ一時心服
セシムルカ如キハ意志湊合ト為ス可ラス

第十六條

説々所與ニ偽為之其誤説タリ其姦説ト同視
本質ニ於テ其約ヲ其約ニ依リテ其約ニ依リテ

第十七條

欺妄無関不此所亦數種アリ或ハ約ヲ結ス人ノ
情據ニ於テ其或ハ其物件ニ於テシ或ハ其主意
ニ於テ不...

第十八條

人ノ其自ラ愚ナルニ依リ他ノ身分并ニ契約ノ
主意情實ニ誤解シ困弊ヲ取ルカ如キハ自ラ作

在學部實故其約因繼成取ルノ責自ラ受ケサ
ルヲ得ス

第十九條

衷情甘服セスシテ苟且承諾スルカ如キハ其人
ノ過ナキ之ヲ衷情甘服ト同視シテ可ナリ若シ
其ノ損失アル所之ヲ對手ニ及ホスベキヲス

第二十條

事實成ルマシキヲ成サント約スルカ如ハ道
理ナキ契約ナリ故ニ其約ヲ無益トス
第二十三條
第二章

第二十一條

道理ナキ契約ヨリ生スル務ハ之ヲ繼成スルヲ
要セス

第二十二條

事實成ルマシキヲノミナラス法律并ニ教化ノ
道ニ反セル者ハ道理ナキトニ属ス可シ

第二十三條

故ニ法律并ニ教化ノ道ニ反セル事ヲ為スヘシ
トノ約ヲ立ツルモ其約亦無益ナリ

ノ素志相達シ復タ互ニ相務ムルヲナシハ

第三條

契約ヲ立テ他人ヲ使フ者一旦其權ヲ棄ルキハ之ヲ放釋ト名ツク既ニ放釋スルキハ他人其意ニ反シ強テ其權ヲ保タシムルヲ得ス

第四條

契約ヲ立テシ者雙方熟議シテ其約ヲ廢棄スルキハ之ヲ名ケテ解約ト云此時新ニ約ヲ立テ向後互ニ前約ヲ用ヒストノ約ヲ為スナリ

第五條

契約ノ主意トナセル物件消盡スルキハ之ニ屬スル務ヲ為シ得ル道理其之故ニ其約無益ナリ
第十四條 專事其地ニテ專事其地ニテ其主ニ屬スル
第十五條 目ニマ

契約ノ權性法ヲ以テ論スレハ歲月ニ依テ得喪不細ナク即チ若干年間用ヒシニ依テ之ヲ得又用ヒ不細ニ依テ之ヲ喪フ等ノ目再キ也

第六條

...

但シ現行律法ニ於テ歲月得喪ノ一ナキ能ハス
 詞訟ノ紛雜ヲ裁斷モシカニ爲ニ正ムル得ル
 方略トスル所ナキ事間用テ之ヲ斷定スル
 第八條ニ於テ歲月得喪ノ一ナキ能ハス
 歲月得喪ノ目ニアリ
 其一 某事某物ヲ多年專制シ殆ト其主ニ異
 其主タル者遂ニ其主タル其權ヲ得ル
 其二 契約ヲ忘却シ多年務ヲ爲サ、ル者遂

ニ其務ヲ廢ス可シ

性法略畢

生去

單

三

性法略

